# いま手渡したいこと

## 子どもたちに文化を
## 教師にあこがれと自由を

奈良教育大学
**越野和之**

こしの　かずゆき／1964年生まれ、奈良教育大学教授。専門は障害児教育学。全国障害者問題研究会副委員長、研究推進委員会委員長。著書に『子どもからはじめる算数―すべての子どもに学ぶ喜びを』（共著）（全障研出版部、2017年）など。

### 第1回
### 「子どもの味方になる」ために

新年度の『みんなのねがい』、教育に関する連載を、と頼まれて引き受けたものの、いざとなるとなかなかむずかしいものです。とりわけ、初回がむずかしい。『みんなのねがい』は月刊誌なので4月号は3月に刊行されます。年度末の忙しい時期の先生たちを読者に想定したらよいのか、いや、やはり4月号だから新年度に読まれることを想定すべきなのか…。好評だった過去の連載をひもといてみたい誘惑に駆られますが、そんなことをするといよいよ書けなくなりそうで、なにも開かずにキーボードに向かいます。

#### 「子どもの味方に」は「きれいごと」？

連載初回、いきなり大上段に振りかぶって「教師のしごと」とはなんだろうか、というところから考えてみようと思います。



私は、大学で、特別支援学校の教員免許状を取得することを希望する青年たちのための入門期の授業を長く担当していますが、ここ数年、毎回の授業の最後に時間をとって、その回の授業の感想を書いてもらうようにしています。提出された感想は、原則としてすべて文字データに書き起こし、一つひとつにコメントをつけて、翌週に「授業通信」として配布します。復習のつもりでこの「通信」を解説していると、つい力が入って授業がなかなか先に進まないという難点もあるのですが、授業内容について自分以外の人の感想や意見などにも触れながら振り返ることにはねうちがあるかなとも思っています。なにより、それぞれの学生の顔を思い浮かべながら書かれた感想を入力し、コメントを考えることが、私自身の楽しみにもなっています。さて、ある回の感想にこんな文章がありました。

「きれいごとだと言われるかも知れませんが、本来教師は児童生徒の味方であり、将来に向けて一緒にあらゆる可能性を広げていく役割があるものだと思います（後略）」。

障害児教育を学び始めたばかりの一回生の感想です。そうか、「子どもの味方に」などと書くと「きれいごと」と言われるんじゃないか、という感覚があるのだなあと思いながら、こんなコメントを書きました。

「決して「きれいごと」だとは思いません。教師は児童生徒の味方であるべきだ、というのは、教員を志すみなさんには絶対に手放さないでほしいことばの一つです。教師になるのなら、ぜひ最後の最後まで、子どもたちの、そして一人ひとりの子どもの味方であり続けられるように、なにを手放してもそれだけは手放さないでほしいと思います」。

#### 多忙さのなかで立ち戻るところ

子どもたちの学習要求を探り、その発達を促すのに必要な教材を吟味し、子どもの実態を踏まえながら授業として具体化していくこと、子どもの実態を踏まえながら授業として具体化していくこと、子どもたちが毎日のくらしのなかで直面する諸課題を検討し、より自立した生活に向けて、生活上のさまざまな力量を身につけられるよう促していくこと、卒業して大人になってからも、地域社会の中で人間らしい暮らしを営んでいけるように、一人ひとりの子どもに即して進路を切り開いていくこと…。障害のある子どもたちとともにくむ「教師のしごと」は多岐にわたります。それらは、どの一つをとっても、決して簡単なことではなく、しかも一人の教師がいくつもの課題に同時にとりくまなければならないのが学校現場の実態です。また、障害児教育の現場では、通常の教育以上に、多くの教職員の緊密な協働が不可欠です。さまざまな会議があり、多くの書類の作成が求められます。さらに、学校外の諸機関との連携も欠かせません。ここでも会議や書類、となりがちです。たくさんの仕事に追われ、明日の授業の準備すらままならない、というのが多くの先生たちの本音かも知れません。でも、そういう多忙さの中でも、「この子のこういう行動にどう向き合ったらいいのか」とか、あるいは「この仕事は何のためにしているんだろう…」と立ち止まり、考えることがきっとあると思います。

そんなときにどこに立ち戻るのか。私は「目の前のこの子の味方になる」ということが、教師のあれこれの立ち居振る舞いを律し、さまざまな課題への向き合い方を判断していく際の「最終的に立ち戻るところ」であって